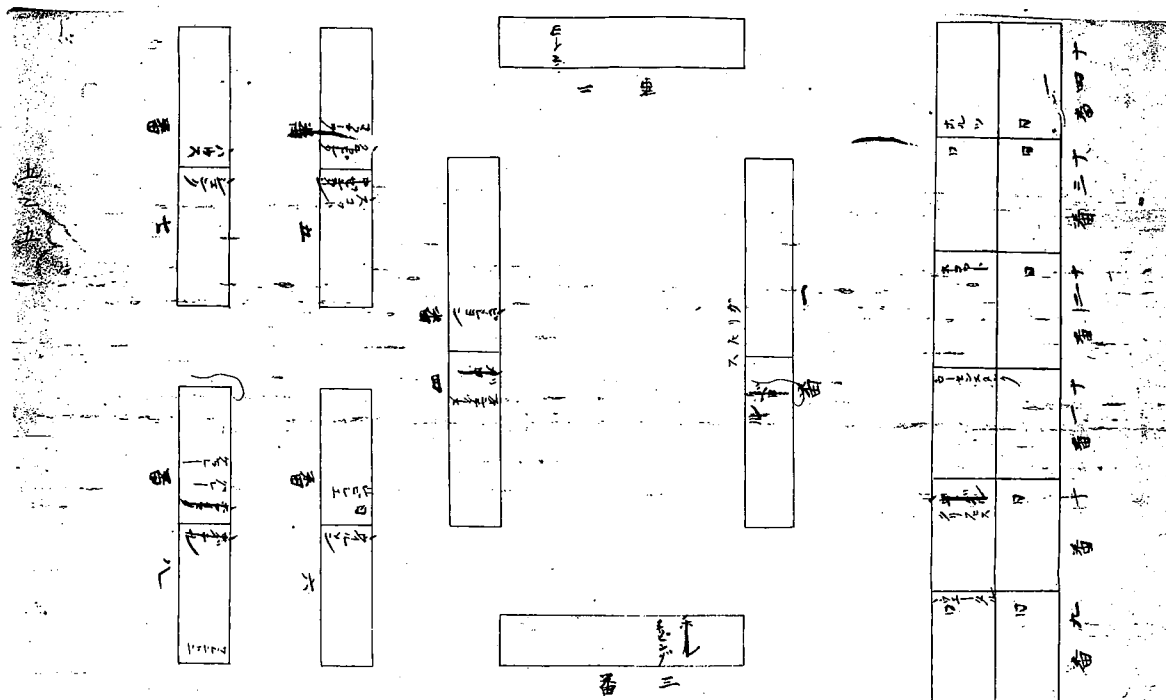


# 東京大学史史料室ニュース

第16号 1996・3・29

## 目 次

明治時代の東京大学の写真 .....	2
世界の大学文書館(6) .....	5
受贈図書一覧 .....	7
史料室日誌抄録 .....	8



「五三五御雇教師旅館一番ヨリ十四番マデノ図」(『文部省及諸向往復付構内雜記』明治4年)

## 明治時代の東京大学の写真

中野 実

**写真資料** 歴史資料として絵画、写真が注目されてきている。もちろん大学史においてもその影響は強くなっている。端的な例が、大学史誌編纂における写真帳、図録（説）類の充実である。大学史誌自体が、学術研究、調査の成果として決して位置付けられず、周年記念事業の一つ、記念式典の引き出物、といったこれまでの経緯を考えれば隔世の感がある。

写真集（帳）、図録（説）類の充実、と一口にいつてもその内容は多岐にわたる。気がついた2、3の点を指摘してみよう。まずは構成である。本体の写真、資料とともに年表、小史、諸統計類（人事も含む）などが掲載されるようになった。写真、資料の理解がより深まり、機関の全体像が把握しやすくなる。第2には写真集（帳）、図録（説）類の最大の課題であるところの、見やすさや、美しさが格段に高まったことである。印刷、写真技術の進歩がそれらを支えている条件である。しかし、それだけではないはずである。文書資料ならば、できるかぎり読めるように掲載して時代の雰囲気ばかりでなく、時代を実感できるようにする。校舎、什器類もただの建築物、物品としてではなく、学校文化史的視点に配慮して多角的に取り上げる。これらの背景に、写真集（帳）類の編纂に学術的な意義を確信して、編纂を進める姿勢があることは明瞭である。さらに第3としては、一つひとつのキャプションの充実と、年表と小史との相互関連づけなどである。

このような現状にあって東京大学の明治時代の、正確には関東大震災以前の写真類に対する撮影、借用依頼が多く寄せられる。ここでは、それらの写真集（帳）

類の情報をすこし整理しておくことにする。

**明治時代の写真** 百年史編集事業における最初の成果であった写真集『東京大学の百年 1877—1977』は、東京大学関係の写真類を大量に収集して編集された。これ以前にも全学を対象としたアルバム、図録はいくつか編纂されているし、『東京大学医学部百年史』に見られるように明治時代の多くの写真類を収録した部局史もある。『東京大学の百年 1877—1977』は、しかし当時では珍しく、巻末に収録写真目録（出典）を付し、学術的体裁を整えていた。その後では1988（昭和63）年に総合研究博物館（旧資料館）が行った特別展示「東京大学本郷キャンパスの百年」の展示目録（カタログ）がある。ここにも工部大学校（虎ノ門）全景（写真）、彩色された建築実施図面などの貴重な図版が掲載されている。展示目録にも図版リストがあるが、『東京大学の百年 1877—1977』の目録をもとに本稿の対象時期のアルバム類を摘記してみると、いくつかに分類できる。第1 大学一覧、第2 卒業記念写真帳、第3 沿革史誌類、第4 一般誌、一般刊行物、である。いま、それぞれに宛てはめてみると、以下ようになる。

### 第1 大学一覧

『東京帝国大学一覧 自明治39年至明治40年』

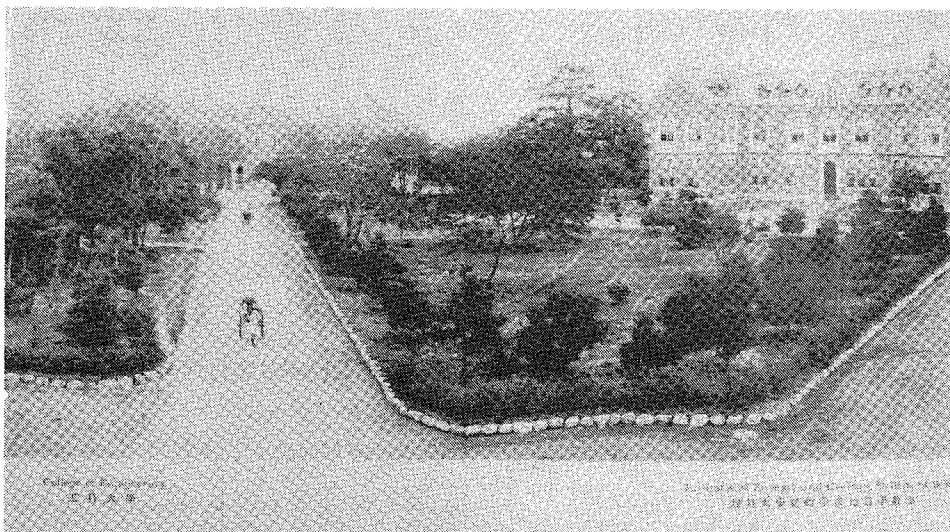
『東京帝国大学一覧 自明治41年至明治42年』

『東京帝国大学一覧 自明治43年至明治44年』

『東京帝国大学一覧 自大正4年至大正5年』

『東京帝国大学一覧 自大正5年至大正6年』

『東京帝国大学一覧 自大正9年至大正10年』



## 第2 卒業記念写真集(帳)

『記念 明治41年7月』(法科大学)

『卒業記念帖』(大正8年刊)(法科大学)

『卒業記念帖』(大正9年刊)(未詳)

## 第3 沿革史誌類

『東京帝国大学五十年史』

『東京帝国大学 Imperial University of Tokyo』  
(明治33年刊)

『東京帝国大学 1904』

## 第4 一般誌、一般刊行物

『明治二十一年撮影全東京展望写真帖』

“The Engineer” Dec.3, 1897

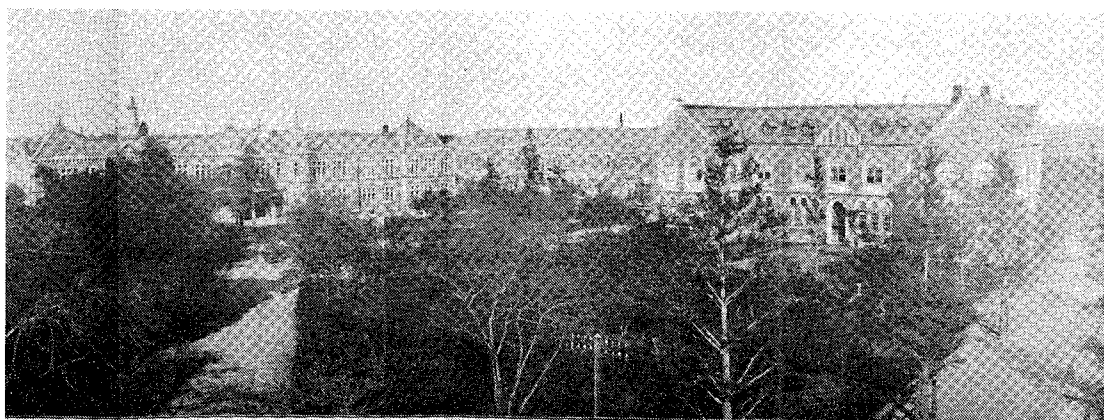
各分類の写真(集)類について説明しておこう。

第1の大学一覧は巻末に掲載されているものである。一覧の目録には東京帝国大学各部撮影図となっているが「図」ではなく、写真である。一覧そのものはもっと早くから編集、刊行されていたが、写真掲載は第1に掲げられている『東京帝国大学一覧 自明治39年至明治40年』からである。本稿の対象時期である関東大震災までは毎年の一覧の末尾に掲載されている。1924(大正13)年度以後になくなってしまい、巻末の附録はそれまでも掲載されていた配置図、平面図のみになってしまう。その後は復活することはなかった。

第2の卒業記念帖(アルバム。写真貼込帳ではなく、コロタイプ印刷のもの。)のはじまりは不明であるが、現在知られているもっとも古いものは1904(明治37年)の医科大学卒業アルバムである(『株式会社イシクラ三十五周年誌』1987年参照)。構成は教授・学生の肖像、講義風景、キャンパスなどからなり、ほぼ現在の卒業アルバムの原型に近い。一覧とは異なり、卒業アルバ

ムは現在まで継続されており、将来の写真資料として期待される。ただ、明治時代のアルバム類の収集はほとんど進んでいなく、明治時代ではさきの医科と法科のみが断続的にあるにすぎない。

第3は極めて数が限定される。大学全体としての記念事業として編纂された沿革史誌類には、『東京帝国大学五十年史』(全2冊、1931年刊)と『東京帝国大学学術大観』(全5巻、1942年刊)との2つを数えるのみである。特に前者には原物が失われ、確認できないものがある。たとえば南校全職員生徒、開成学校校庭などである。本郷キャンパスの校舎群でも道路も整備されていない、竣工もない写真が掲載されている。もう一つが東京帝国大学を紹介するために作成された写真集(帳)である。それが『東京帝国大学 Imperial University of Tokyo』(明治33年刊)と『東京帝国大学 1904』の2冊である。赤レンガ時代の本郷キャンパスを知りたい、という要望の9割方はこの2冊で満たせる。1900(明治33)年、1904(明治37)年ともに小川一真の製作にかかり、前者の前書きによればパリで開催される万国博覧会の出品作品として「校舎設備ノ状況ヲ撮影シ之ヲ総長前総長及其他職員ノ肖像ヲ加ヘテ帖」をなしたとある。1904(明治37)年はパリ博4年後のフィラデルフィア博への出品である。パリ版は肖像写真を除くと50枚の写真が収められている。校舎をはじめとして講義風景、実験室、列品室など教育研究の現場、現状を写していた。この2冊は再現性にすぐれ、精巧でかつ少数の写真印刷物としてのコロタイプ印刷の特色を遺憾なく発揮しているものである。ちなみに、パリ版の製作コストは、文部省への報告によれば45円であり、学会月報には「製本部数ニ限りアルニ付至急申込マレタシ」として4円50銭にて実費販売されたようである。



第4にはこのほか『風俗画報』があがっているが、系統的、継続的に追求することは難しいように思われる。その際の基本参考文献としては村上清子編著『国立国会図書館所蔵 写真帳・写真集の内容細目総覧—明治・大正編—』国立国会図書館専門資料部編『参考書誌研究』(第33号、1987)がある。

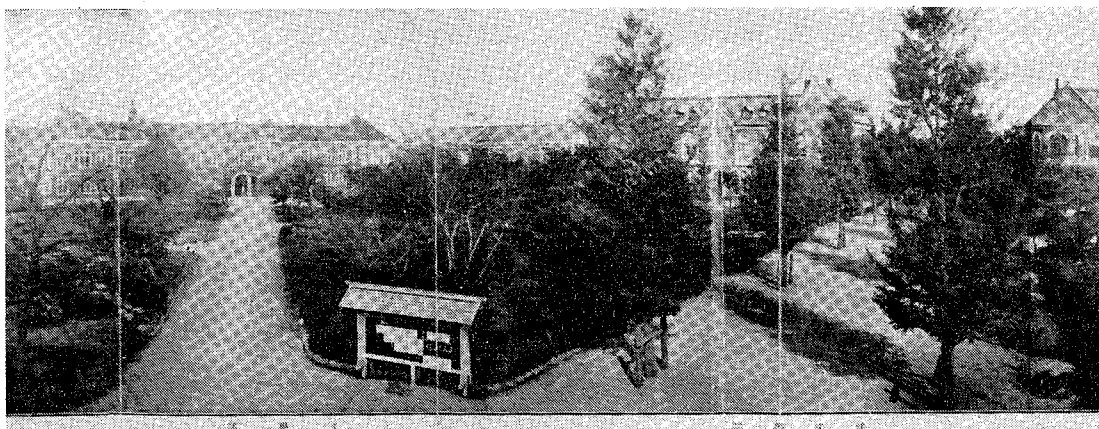
**東京帝国大学正面全景** ところで第3で紹介した写真集(帳)のなかでひととき目立つのが、正門前から撮影した東京帝国大学正面全景である。明治時代の本郷キャンパスを鳥瞰できるほとんど唯一の写真である。パノラマ写真ではなく、複数の写真を繋げて全景を構成しており、1900年のパリ版から登場している。第1で取りあげた大学一覧にも掲載され、もちろん『東京大学の百年』、『東京大学本郷キャンパスの百年』にも収められ、多くの東京大学特集の雑誌類を飾ってきた。しかしよく見ると、この東京帝国大学正面全景にはいくつかの種類がある。各頁下段に3種類の全景写真(ただし紙面の関係で工科(工学部)と理科の部分のみ)を収録してみた。

第1はパリ版収録分である。1900年頃に撮影されているから工科大学竣工から12年後であるが、木々もいまだ小さく、広々とした印象である。第2は『東京帝国大学一覧 自明治41年至明治42年』の収録分である。この年の撮影図から、現在の正門から大講堂(安田講堂)への道に銀杏の並木が見られる。前年の撮影図に

はないのであるから、この年に植樹され、新たに撮影されたと断定できる。下方には電信柱がしっかりと写っている。撮影の季節の違いにより、木々が密集してきているさまがうかがえる。工科校舎の後方にある尖塔の時計台は第一高等学校である。第3は同じく一覧(自大正9年至大正10年)からである。撮影の場所が明確に異なるようで、第1の全景と同様な印象であるが、木々の成長ぶりははっきりしている。さらにいくつかの変化もある。電信柱が消えてなく、正門に入ってすぐのところに掲示版が新設されたようである。さらに電燈も見える。このほかにも全景写真はありますが、ここでは、3種3様の写真を紹介するに止める。

お願い 明治時代の、正確には関東大震災以前の写真資料について『東京大学の百年』、『東京大学本郷キャンパスの百年』を素材に写真集(帳)を中心にみてきた。駆足で紹介したため、漏れ落ち、見落としが多々あるであろう。

写真が取られる場合、機会は多種多様であり、いろんな形態(歓送迎会、記念式、絵葉書、竣工記念、見学土産など)で残されている可能性が高く、果たしてどのくらいの写真(コロタイプ印刷を含む)が現存しているのかすら、把握できない現状である。卒業アルバム、一枚の写真でも結構ですので、ご教示をお願いしたい。



## 世界の大学文書館(6)

### ストラスクライド大学文書館

スコットランドはグラスゴウ市のストラスクライド大学 (University of Strathclyde) には、少々趣の違う大学文書館 (Strathclyde University Archives) がある。

同大学は、人文社会科学部、教育学部、工学部、理学部及びビジネススクールの各学部からなり、現在およそ12,000人の学生(そのうち3,000人ほどが大学院レベル)を擁するスコットランド第3の規模の総合大学である。1964年に、王立科学技術カレッジ (Royal College of Science and Technology) とスコットランド商科カレッジ (Scottish College of Commerce) が合併して誕生した大学だが、その起源はかなり古く、1796年設立のアンダースンズ・インスティテューション (Anderson's Institution) に遡る。日本でも有名なグラスゴウ大学のすぐ近くにある。

我々は、大学文書館というと、「非現用文書」や卒業生の名簿などの歴史的資料の保存、利用、公開のための機能を思い浮かべる。しかし同大学文書館は記録センターの機能を兼ねて1977年に設立されたもので、大学本部の文書管理システムに関与して「半現用文書」も扱っており、むしろそちらの方に存在意義を見出している。

私たちが、1992年6月に同大学文書館を訪問した際に、大学アーキビストのマグラス (James S. McGrath) 氏が強調されたのがその点だった。

同大学文書館の専任職員は大学アーキビスト及びアシスタント・アーキビストの2名である。職務の内容も、歴史的資料の管理よりも、本部事務局の文書管理、

資料管理の方に比重があるようである。もっとも、一方でアーキビストとしての職務については、別に文書担当部課からの協力をえているそうである。

大学アーキビストは、事務局の Senior Assistant Registrar の職務を兼ねており、大学アーキビストの職務の方に割く時間は1割程だとのことである。ただ、それは、Senior Assistant Registrar が、学籍管理などを担当する職務なので、記録管理という点でアーキビストと連続性があるということもあるのだろう。地位の高さは、日本の国立大学の学生部の課長補佐ぐらいに相当するのだろうか。

アシスタント・アーキビストは本部の委員会事務なども行っているということだが、こちらの方は、アシスタント・アーキビストの職務に9割の時間を割いているという。恐らく、資料整理や目録作成などの作業に従事する時間が多いのだろう。

もちろん、アーキビストの本務は、文書を収集し、保存し、利用可能にすることで、そうした業務も大学から期待されている。また同大学文書館は、臨時に展示を行ったり、講座を開いたりすることもある。しかし、歴史的資料を取扱っているようなイメージよりも、文書情報の取扱い担当部局というイメージが強い。大学アーキビストのマグラス氏は、博士号のほかに文書管理のディプロマ (postgraduate diploma) を、アシスタント・アーキビストも博士号のほかに情報工学のディプロマを持っているが、そうした人材を置くのも大学文書館の性格づけと関わっているわけである。

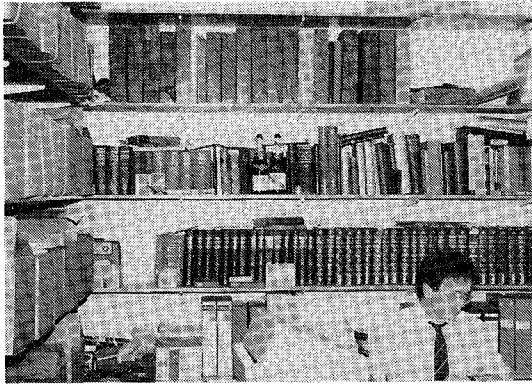
このような勤務体制が可能なのは、ストラスクライド地域文書館 (Strathclyde Regional Archives) と、資料受入れの役割が補完的に分担されているかららしい。地域文書館及び市立図書館との間に公的な関係は



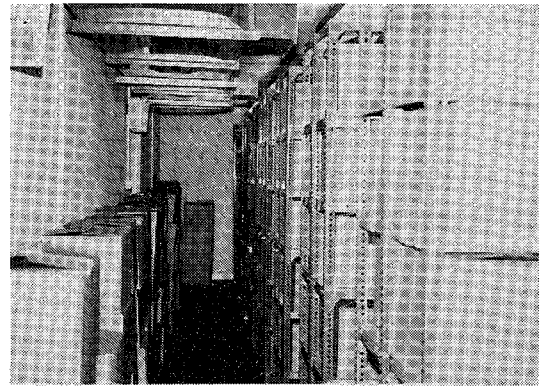
大学文書館のある事務局棟の入口



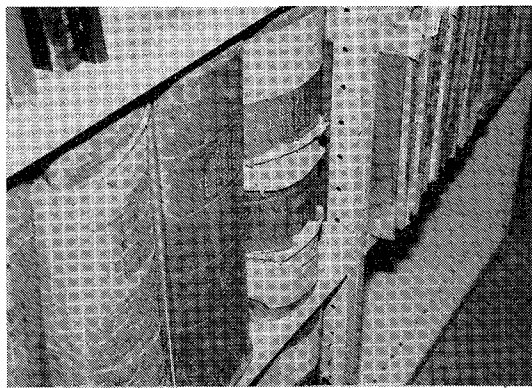
大学アーキビストの McGrath 氏 (向って右) と  
アシスタント・アーキビスト



オフィスで執務中の McGrath 氏



近年の文書はボール箱で保管



前身校 The Royal Technical College の簿冊

ないが、必要があれば緊密な協力を行っている。つまり、大学文書館の受入れ資料を、同大学、前身校、教職員及び学生に関する文書資料に制限することが可能だからなのである。現在所蔵されている、大学に直接関わらない若干の資料は、大学文書館誕生以前から引継がれたものである。そういう点では、近隣のグラスゴウ大学文書館が、関連の歴史資料も収集し、またビジネス・アーカイブズも併設しているのとはかなり異なった体制である。

アーキビストは、大学事務局長の配下に置かれているが、それは、大学本部の記録管理に関与していることからある程度想像されることである。ただ、学長直属でなく事務局長の下に置かれる、という点に、現用文書、半現用文書を扱う立場にあることとの整合性が感じられる。閲覧許可の判断は、大学アーキビストにまかされているが、それでも学生などが、過去10年以内の大学記録を見ようとする場合は、アーキビストが大学事務局長の許可を得なければならないことになっているという。

アーキビストの位置づけで興味深いのは、アーキビストは、どの委員会にも報告を提出する義務がないことである。それは、同大学の大学組織の運営が、委員

会よりも個人を基盤にして行われ、事務局長の配下にあることで十分だと考えられているためらしい。但し、強いていえば同大学の The University Court に対して責任を果たさなければならないと考えられる、ということである。Court は、英国の大学の意思決定機構の1つで、その機能は大学によって異なっているが、同大学でもやはり最高の意思決定機関らしく、日本の国立大学の評議会に近い存在らしい。こうしたことから、同大学文書館が、大学の中枢部に直接結びついた機関となっていることがうかがわれる。

大学文書館オフィスは組織としては、大学事務局中に位置づけられており、大学図書館とは管理上のつながりが無い。施設は2ヶ所に分れている。1ヶ所は本部事務局（中央管理棟）にあり、事務室、調査室および収蔵庫からなっている。もう1ヶ所は離れたビルの中にあり、災害に備えて複製等を所蔵している収蔵庫のみである。収蔵庫の容量(棚の長さ)は、2,626フィート(800メートル相当)で、別に防備用収蔵庫が300フィート(90メートル相当)である。

大学文書館オフィスに関する規則は同大学の『大学一覧』には掲載されておらず、特別に制定されていないらしい。しかし、前述の The University Court は、王立歴史文書委員会 (the Royal Commission on Historical Manuscripts) によって作られた「記録保存庫のための基準 (Standard for Record Repositories)」(1990年)に賛成しているということである。

付録 私は、1992年6月下旬、財団法人三菱財団の研究助成金(研究題目「近代日本の高等専門教育、及び学術形成に果たしたお雇い外国人の役割に関する総合的研究」、研究代表者寺崎昌男)により、旧工部大学校の資料収集の目的で、スコットランドのグラスゴウ市に中野実氏(現・東京大学史史料室)とともに出張した。その際の訪問先の1つがストラスクライド大学文書館であった。以上に紹介した内容の多くは、我々からの質問に対して大学アーキビストの James S. McGrath 氏がお寄せ下さった回答に基づいている。(群馬大学教育学部助教授 所澤 潤)

## 受贈図書一覧（平成7年3月～7月）

愛知大学史紀要（第2号）		I C Uの回想	
同大学五十年史編纂委員会	平成7年3月	国際基督教大学	平成7年3月
北海道立文書館史料集第10 申奏録(四) 明治11年		国際基督教大学建設後援会記録	
同文書館	平成7年3月	同大学	平成7年3月
北海道立文書館研究紀要（第10号）		大学論集 第24集	
同文書館	平成7年3月	広島大学大学教育研究センター	平成7年3月
北海道立文書館所蔵公文書件名目録（第10号）		高等教育統計データ集	
同文書館	平成7年3月	広島大学大学教育研究センター	平成7年3月
北海道立文書館所蔵資料目録10		沼津博物館紀要19	
同文書館	平成7年3月	同博物館	平成7年3月
中央大学史紀要（第6号）		同志社談叢（第15号）	
同大学百年史編集委員会	平成7年3月	同社社史資料室	平成7年5月
中央大学百年史編集ニュース(23)		チェンバース版「経済学」（後半）	
同大学百年史編集委員会	平成7年1月	慶應義塾福澤研究センター	平成7年3月
神奈川大学評論 20		広島修道大学研究叢書 第93号	
同大学評論編集専門委員会	平成7年3月	同大学総合研究所	平成7年4月
研究ノート 大学と社会27		東亜同文書院大学と愛知大学（第2集）	
東北大学教育学部附属大学開放センター	平成7年3月	同大学東亜同文書院大学記念センター	平成6年12月
法政大学史資料集 第18集		東亜同文書院大学と愛知大学	
同大学	平成7年3月	同大学東亜同文書院大学記念センター	平成5年5月
文献ジャーナル34		愛知大学史紀要（第1号）	
富士短期大学	平成7年3月	同大学五十年史編纂委員会	平成6年3月
サティア《あるがまま》第18号		愛知大学史紀要（第2号）	
東洋大学井上円了記念学術センター	平成7年4月	同大学五十年史編纂委員会	平成7年3月
戦後教育史研究 第10号		東北学院百年史	
明星大学	平成7年3月	同学院	平成元年5月
次世代・次期システム検討ワーキング・グループ報告		東北学院百年史（資料篇）	
同大学附属図書館	平成7年3月	同学院	平成2年5月
明治大学史紀要13		東北学院百年史（各論篇）	
同大学	平成7年3月	同学院	平成3年5月
九州大学大学史料叢書（第3輯）		東北学院の100年	
同大学大学史料室	平成7年3月	同学院	昭和61年5月
中央大学史資料集 第13集		神奈川大学評論 21	
同大学	平成7年3月	同大学評論編集専門委員会	平成7年7月
立命館百年史紀要（第三号）		横浜関係新聞記事年表稿（1895～1899）	
同館百年史編纂室	平成7年3月	横浜開港資料館	平成2年3月
広島修道大学研究叢書 第37号		五味亀太郎文庫（目録）	
同大学総合研究所	昭和62年2月	横浜開港資料館	平成7年3月
広島修道大学研究叢書 第43号		昭和の戦争と沼津	
同大学総合研究所	昭和62年12月	沼津市明治史料館	平成7年7月
広島修道大学研究叢書 第79号		戦後値段史年表	
同大学総会研究所	平成5年8月	朝日文庫	平成7年7月
国際基督教大学建設記念会日記		日本の大学教育の現状と課題	
同大学	平成7年1月	広島大学大学教育研究センター	平成7年3月
I C Uの設立をめぐる		卒業生からみた京都大学の教育	
国際基督教大学	平成6年6月	広島大学大学教育研究センター	平成7年3月

史料室日誌抄録（平成7年12月～平成8年3月）

- 11.31 水 『東京大学史史料室ニュース』第15号発行。  
2. 1 木 東京大学史史料研究会開催。  
「戦前期留学生の受入れデータの分析について」  
2.14 水 史料室保管「秘書」のマイクロ化のため撮影開始。  
2.23 金 第41回東京大学史料の保存に関する委員会開催。学徒動員・学徒出陣に関する報告について。  
3.18 月 「学徒動員・学徒出陣に関する調査」について総長に報告。  
3.19 火 「学徒動員・学徒出陣に関する調査」について学部長会議において報告。

3.22 金 古在元総長遺族の方より資料（段ボール6箱）受入れ。

この間の閲覧者数

学内者 10名

学外者 28名

主な学外閲覧者所属機関

群馬大学、広島大学、中京大学、浦項工科大学、  
宮内庁、京都大学

文献撮影・複写許可件数

3件

調査（照会）件数

22件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第16号

発行日：1996年3月29日（年2回刊）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話（3812）2111 内線2036

印刷所：よしみ工産株式会社

北九州市戸畑区天神1-13-5

Archives Section of the University of Tokyo